

## I. 極東ロシアでの野外調査と食事

ロシア極東部アムール州ゼーヤ市にあるゼイスキー自然保護区（面積約 99,430ha）において、森林資源量の適正管理等を評価する目的で、植生調査を伴う日露共同研究が 2016 年度より始まりました。私たちの研究グループは、東京大学の露木聡先生及び大学院生の Khatanchaoren Chulabush 氏、筑波大学の清野達之先生、本学の杉浦幸之助先生及び筆者の計 5 名です。ロシア側からはロシア科学アカデミー極東支部地質学・自然管理研究所の Bryanin V. Semen 研究員、アムール植物園の Borisova G. Irina 研究員、ゼイスキー自然保護管理所の Lisovskii V. Viktor 副所長の計 3 名、合計 8 名のチームになりました。



写真 1. 2泊3日分の食糧（写真：和田直也）

8月上旬の野外調査前半は、自然保護区内の山岳植生を調べるため、2泊3日の行程で6時間程登山をして山頂に近い山小屋に宿泊しました。全員の食糧は、ソーセージ、缶詰、黒パン、チーズ、野菜等、かなりの重さになりますが分担してリュックサックに入れて担ぎ上げます（写真1）。食事は野外調査で疲れた後の楽しみです。我々は日本から醤油やワサビを持ち込み、色々な食材に加えて味の変化を楽しんでいます。ロシアの方々にもワサビ醤油の味は大変人気があります。



写真2. フィルムケースのショットグラス、軽くて丈夫でちょうど良いサイズ（約 30cc）（写真：和田直也）

Viktor さん愛用のショットグラス（写真2）一杯に注がれたウォッカを、森の神様にも感謝しながら有難く頂き、ワサビ醤油ソーセージをおつまみに、ロシアの森での夜は更けて行くのでした。

（文責：和田直也）

## II. NIHU プロジェクト報告：国際シンポジウム「北東アジアにおける資源の持続可能な利用」開催

極東地域研究センターでは、2017年1月18日に国際シンポジウム「北東アジアにおける資源の持続可能な利用」を開催しました。このシンポジウムは、当センターが研究拠点の1つとして参加している、人間文化研究機構（NIHU）「北東アジア地域研究」プロジェクトの一環として、NIHUの共催、同プロジェクト国立民族学博物館拠点の協力、および富山県の後援を得て開催したものです。当日は、日本だけでなく中国・韓国・台湾の研究者と富山県の実務担当者にもご参加いただき、「北東アジア」・「資源」・「森林・木材」をキーワードとした多岐にわたる研究報告・講演を設定することができました。



写真3：午前の研究報告

シンポジウムでは、午前の部として研究者向けの英語セッション（写真3）を、午後の部として一般向けの公開セッションをそれぞれ開催しました（写真4）。午前中のセッションでは、経済学・文化人類学を専門とする日本・中国・韓国・台湾の研究者からの研究報告があり、活発な議論が交わされました。研究報告は、経済モデル（一般均衡モデル）を用いた理論研究（徐世勳教授・国立台湾大学）、計量経済学のアプローチに基づく実証研究（趙國慶教授・中国人民大学、馬駿教授・富山大学）、生態系・環境評価の経済学的手法を巡る方法論的研究（金俊淳教授・韓国江原大学校）、日本における非木材林産物（non-timber forest products）の利用・管理を巡る文化人類学的アプローチに基づく研究（池谷和信教授・国立民族学博物館）と多岐にわたり、経済学の理論・実証・方法に加え文化人類学の視点も踏まえた、充実した内容となりました。討論者にも経済学・政治学・生態学の研究者

を迎え、「北東アジア」・「資源」・「森林・木材」をキーワードとしつつ、ディシプリンを横断して意見を交換することができました。



写真 4：午後の講演

午後のセッションでは、日本・中国・韓国各国における森林・木材産業および貿易の歴史・現状・課題を概観する研究者による報告（金世彬教授・韓国忠南大学校、永田信教授・東京大学、孔祥智教授・中国人民大学）と、富山県における県産材の現状と利用促進のための行政の施策（清水真人参事・富山県農林水産部）についての講演を設けました。午後の一連の講演は学内外から多数のご参加をいただいたほか、『北日本新聞』、『富山新聞』、『北陸中日新聞』、『読売新聞』の各紙に取り上げていただくなど、大きな反響を頂戴しました。

当センターでは、今後もこうした学際的・国際的なシンポジウムやワークショップ等を継続的に開催していきます。詳細は決定次第ウェブサイトでご告知致しますので、是非奮ってご参加ください。

（文責 伊藤 岳）

### III. ASEAN に向かうロシア

ロシアや中央アジアを舞台に研究していると、なかなか南の国に行く機会はない。ところが、昨年から事情が少し変わってきた。まず、ベトナム・ハノイ市での国際コンファレンスに、それから、シンガポール国立大学が主催する国際コンファレンスにご招待いただく機会があった。どちらもロシアと ASEAN との関係がテーマに組み込まれたものであった。それってたまたまではないのかと言われそうだが、実はそうでもない。ロシアは、ベトナムとシンガポールとの関係についてはご執心であり、両国間の交流は、2016年に一段と深まっているからだ。ベトナム、シンガポールともにロシアへの関心はいま高い。

ロシアを中心とするユーラシア経済連合が、2016年7月にベトナムとの自由貿易協定を批准し、同協定は同年10月に発効した。ユーラシア経済連合が域外諸国との間で締結した最初の自由貿易協定がベトナムとの協定であったことには、それな

りの意味がある。

ウクライナ問題を巡る欧米の対露経済制裁という環境のなか、ロシアはアジア政策を強化してきた。中国との戦略的パートナーシップばかりが目され、ロシアのアジアにおけるプレゼンスの低さを挙げて、ロシアが中国の「ジュニア・パートナー」となりつつあると欧米の研究者からは揶揄される傾向にあるが、ロシアはアジア太平洋地域における多角的な経済・政治関係を模索し、中国だけではないアジアとの関係を構築しようとしていることも確かなのである。

ベトナムとの自由貿易協定は、ロシア国内でも自国の製造業にとって脅威となるとの反対論も多かったが、5年から10年間の移行措置を一部設けながら、約9割の貿易品目の関税が撤廃される。ユーラシア経済連合の次の交渉先は、シンガポールである。シンガポールとの貿易では、石油関連産品に関してロシアに有利な関税撤廃が模索されているものの、その交渉は伝統的な貿易というよりもサービス貿易が焦点になる。そして、その次は？ユーラシア経済連合の貿易担当相は、近い将来の中国との自由貿易協定の協議を明確に否定している。「一帯一路」構想では、中ロ両首脳ともユーラシア経済連合との連携を謳いながらも、中国が望む自由貿易協定にロシアは否定的である。中国だけではないロシアの東方政策は、ASEANと日本を睨みながら進行していると言える。

（文責：堀江典生）

### IV. 富山からの雪だより（2016/2017冬）

東京管区気象台によると、東京で2016年11月24日に初雪となり積雪が観測されました。11月に積雪が観測されるのは、1975年の統計開始以来の観測史上初ということで、ニュースなどで大きく報道されました。一方で富山の状況を見てみると、東京に比べて16日遅い12月10日に初雪が観測されました。これは富山では平年より8日遅い日となりました。立山の初冠雪日も2番目の遅さで、初冬日も遅い方から2番目となりました。富山の今冬は、昨年と同じく暖冬で少雪という特徴でした。西高東低の冬型の気圧配置が強まり大雪をもたらすものの、長続きせず一時的な気圧配置となりました。気温は、12月から2月までの3か月平均で4.6℃と平年と比べて高くなっています（+0.9℃）。今冬の富山市の最深積雪は、2017年1月24日の39cmで、平年の62cmに比べて6割程度にとどまっています（図1）。来冬や如何に。

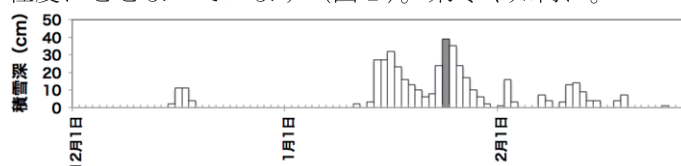


図1：2016/2017年冬の富山の積雪深

（文責：杉浦幸之助）